

置きたい。

九、第二十二行第二語を *bodisti* と讀んである、尤も此の外にも既に第十三行にも同様に讀んであるが、かゝる讀み方は面白くあるまい、自分の知る限りでは *Bodhisattva* なる言葉をウイグール語のものには *bodistv*; *bodistv*; *bodisav*; (ウイグール字を記入し得ないのは遺憾である) 等とかゝれたものはあるが *bodisti* とかいたものはまだ見ない、一體此の文字では *i* と *v* とは甚だまぎらはしいから *bodisti* と讀まれるのも無理からぬ様ではあるが此の寫經の文字などは甚だ鮮明に *bodistv* 即ち *v* 字が見えて居る。この行のも石版の方では *i* と *v* も讀みたくなるが卷頭の寫眞には明らかに *v* 字になつて居る、よしまた *i* に似て居るとしてもそれは文字がまぎらはしい丈けのことでもとより *v* と讀むべきであらう第三十行及四十五行のも同様である。

十、第二十六行末字は *a* に非ずして *z* である、第九行の場合と同様である。

十一、第二十九行末語觀世音の音譯は *quasi* に非ず *quansi* と寫眞に見えて居る。

十二、第三十三行第三語は *qaisiqi* と讀み「代リノ場所ニ於テ」と譯してあるが「眉ト代リノ場所ニ於テ中間ニ於テ」といふのはどういふ意味であらうか、これも *i* と *v* とを讀み違へたのでまさに *qavisiqi* と讀むべきである。此の語は解剖すれば *qavis+qi* で *qavismaq* 即ち「相逢ふ」「相迫る」の意で今日のチャガタイ語でも、またオスマントルコでも同義である (*Vambéry; Etymologisches Wörterbuch*) 即ち「眉が相迫る中間に」の意であつて、第三十四行の「中間に」なる語はかくて初めて解釋することが出来るであらう。

十三、第四十一行の初語 *tanglacsiz* は *tanglnčsiz* で *l* の次は *a* でなくして *n* である。